＜論　　説＞

Motivation and Personality（第３版）の問題点について

―学術書として使うべきではない書物―

三　島　斉　紀

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．マズロー「再版序文」転記に関する不備
Ⅲ．第３版“前書き”の内容に関する疑義
Ⅳ．フレイジャーら第３版の“本文中”に見られる種々の細工
（ａ）文章の改竄が無数に見られること
（ｂ）マズローが用いていた用語の挿げ替え
（ｃ）参考文献に関する指摘
（ｄ）脚注に関する留意点等
Ⅴ．むすびにかえて

Ⅰ．はじめに

経営学における動機づけ理論に関する教科書等を読んでいると，頻繁に目にするのが米国の心理学者 A. H.マズロー（Abraham Harold Maslow；1908−1970）の名である。彼は人間には生得的に有する５次元の欲求があり，その最高次欲求として「自己実現」の概念を提唱したことで広く知られている。彼は，こうしたコンセプトを著作 *Motivation and Personality* の中で詳述している（所謂，1954 年初版）。

後に同著は彼自身の手によって修訂がなされ，1970 年に再刊されている（second edition）。この折，マズローは「私はこの 16 年の間に得た主たる教訓をこの再版に含めるように試みてきた（I have tried in this revision to incorporate the main lessons of the last sixteen years.）」と明記している（つまり再版は，初版と全く同じものを単に増し刷りしたものではない[1]）。マズローは，この再版が出された同年６月８日に逝去している。

1　Maslow, A. H., *Motivation and Personality*.,（Rev Ed）, New York : Harper & Row.,1970., p.ix.と Maslow, A. H., *Motivation and personality*., New York : Harper & Bros.,1954.の内容を比較されたい（両著作は訳本が出ているが，本稿での和訳はそれに依拠しない）。また，この２冊の相違点については，三島斉紀，「A. H. マズローの *Motivation and Personality* に関する一考察」，『商経論叢』，神奈川大学経済学会，第 50 巻第１号，2014，pp.1−12.にて説明されている。

ところでその17年後，R.フレイジャー（Robert Frager），J.ファディマン（James Fadiman），C.マックリーノルズ（Cynthia McReynolds），R.コックス（Ruth Cox）等が編集者等となり，同著“第3版”なるものが公刊された（Third Edition；Addison-Wesley Educational Publishers Inc., 1987.；和訳本はない）。これは（1954年初版には見られず）1970年再版にのみ散見される「メタ欲求（metaneeds）」[2]や「存在価値（Being values）」[3]などの後年のマズローの鍵概念が見られること，また，再版にのみ挙げられた追加の自己実現者とされた被験者名が挙がっていること（例えば，M.ブーバー（Martin Buber）やP. クロポトキン（Peter Kropotkin等）[4]，他方で，1954年初版には自己実現者として挙げられていたが，1970年再版においては外されたS. フロイト（Sigmund Frend）やベートーベン（Ludwig van Beethoven）の名前が見られないこと，更には「初版序文」が載せられずに「再版序文」のみが掲載されていることからも，この第3版なるものの底本が1970年再版であることが読みとれる。

しかしこのフレイジャーら第3版についていえば，目次を開いた瞬間に強い違和感を抱かざるを得ない。なぜなら，これまで目にしてきたことのあるマズローの言葉とは異なる文言が幾つも飛び込んでくるからである。照査のため1954年初版を読んでも，それらの各章の基となった原著論文を読んでも，はたまた，それらが後年に再掲載された著作等に目を通しても，それでも目にしたことが無い文章が無数にあることにすぐに気づく。そうしたマズロー著とされていながらも，彼が書いた訳ではないと思われる文章を数多目の当たりにする時，第3版編集者のフレイジャーらがマズローの言葉を正確に伝えているのだろうか…という強い胸騒ぎを覚えざるを得ない。

そのため本稿では，この第3版の中身を詳らかにしていくことを目的としたい。というのも近年，このフレイジャーらが編集した第3版を好んで用いてマズロー理論を解説している学術書と銘打ったものを幾つも目にするようになってきた故である。即ち本稿は，この“フレイジャーらによる第3版なるものを学術書として用いるのは妥当であるのか”という点を念頭に，考察を進めていくこととしたい。

ところで，本稿ではマズローが著したものと，フレイジャーらが編集したものと差異を明瞭にするために，以下より，それぞれ“マズロー初版”（1954年出版），また“マズロー再版”（1970年出版），そしてフレイジャーたちが編集した第3版を“フレイジャーら第3版”と便宜上，記していくこととしたい。

Ⅱ．マズロー「再版序文」転記に関する不備

フレイジャーら第3版の頁を捲って，すぐに危疑を抱かざるを得ない箇所として，マズローが

2　マズロー再版 p.134., フレイジャーら第3版 p.66.
3　マズロー再版 p.111., フレイジャーら第3版 p.80.
4　マズロー再版 p.152., フレイジャーら第3版 p.128.

1970 年に書いた「再版序文」の転記部分がある。事実，「再版序文（PREFACE TO THE SECOND EDITION）」[5] との名が付されているのだから，その通りそのまま 1970 年「再版序文」が転記されているものと読者は当然考えるだろう。しかしフレイジャーら第 3 版では，そうなっていないのである。

一例として，マズロー自身の手による 1970 年「再版序文」に目を通していくと，そこには数多くの参考文献が挙げられている。これは，そこでなされた主張をなぜ彼がしているのかに至ったかについて，読者が裏を取れるように丁寧に補足していっており，こうした書き方はマズローが好んでする論文執筆のスタイルである。その参照されている箇所は，ゆうに 40 以上（30 冊ほど）を数える。

ところが，そうした 1970 年のマズロー自身の手による「再版序文」とされている箇所の参考文献のうちの多くが，フレイジャーら第 3 版で転載せられた当該箇所にて取り除かれていることに気づく。例えば，マズロー再版の p.xxiii.の下から 13–14 行目にあるムスターカス（Moustakas, C.）が編著した参考文献 344 が，その箇所に該当するフレイジャーら第 3 版 p.xxviii.の下から 6 行目では見当たらない。否，このムスターカスらの著作そのものが，フレイジャーら第 3 版の参考文献一覧の pp.239–243.と pp.266–271.にそもそも載せられていない（取り除かれている）。

ところで参考文献 344 は，*The Self*；*Explorations in Personal Growth.,* New York：Harper & Bros.（1956 年）なる著作である。同著にはマズロー自身も寄稿しており，その原稿名は“Personality Problems and Personality Growth”等である。そして同著には，ムスターカスも“True Experience and the Self”なる原稿等を掲載している。

「序文（PREFACE）」（pp.xv.-xvi.）を見ると，ムスターカスは，同著に寄稿したマズローに対し，「順応（adjustment）」（p.xvi.）という，所謂対処行動についてや，「如何様にして人間となっていくかという手法（what it means to be human）」（p.xvi.）についてなど，幾つもの事柄に気づかせてもらったと記している。

また同じくマズローの言葉を介して，フロム（Fromm）やムーニー（Mooney）について多くの洞察を貰ったことについても触れている。具体的には，マズローの言葉からフロムについて，当人の「道徳的価値（moral values）」（p.xvi.）なるものが単に両親からの教えの産物に過ぎないものではなく，内なるその人の存在そのものの表出であること，また，ムーニーについては，「創造性に関する研究の可能性（the possibilities for creative research）」（p.xvi.）や「美的価値（aesthetic value）」（p.xvi.）の次元に関する科学的な探求方法を知ることができたと示されている。即ち，こうしたマズローが誰から美的価値や道徳的価値ということについての知見を深めたかに関して（間接的とはいえ）示唆しているムスターカスの編著を，言い換えれば，こうしたマ

5　フレイジャーら第 3 版 pp.xvii-xxxi.

ズローの研究歴を知っていくのに重要な手掛かりを与えてくれる著作 *The Self* を何故，参考文献からが恣意的に取り除いたのかの説明を，フレイジャーらは何一つ行っていない。

他にも，マズロー再版 p.xxiii.の下から 13 行目にある参考文献 441 の箇所には，ビッヒ（M. Vich）らによる 1969 年著作 *Readings in Humanistic Psychology* が挙げられている。これは当時のアメリカで興隆をみせつつあった人間主義的心理学に関する代表的な著作の 1 つである。しかし同著もフレイジャーら第 3 版 p.xxviii.の下から 5 行目では取り除かれており，これまた参考文献一覧からも消されてしまっているため，マズローが何を根拠にそこで種々の主張をしているのかが読者からして分からなくさせられてしまっている。これら以外の再版序文箇所として転記すべきであるにも拘らず，そうしていない点については脚注を参照されたい[6]。

Ⅲ．第 3 版“前書き”の内容に関する疑義

他にも疑義を感じざるを得ない点が小生にはある。フレイジャーらによる「第 3 版序文（PREFACE TO THE THIRD EDITION；pp.xi-xv.）」や「謝 辞（ACKNOWLEDGMENTS；p.xvi.）」，また「緒言（foreword；pp.xxxiii-xii.）」等の，謂わば“前書き”箇所に目を通していくと，彼らはこの「*Motivation and Personality* なる本は，今世紀もっとも独創的な心理学者のうちの一人によって進められた研究のオリジナル録である（*Motivation and Personality* is an original record of the work in progress of one of the most creative psychologists of this century.）」（p.xi.）とし，これまでどれほど多くの著作にこの書が参照されてきたかを紹介している。そして，「この *Motivation and Personality* 第 3 版では，マズローの建設的な考え方に光を当て，また，はるかに進んだ概念を強調しようと見直しを行ったものである（This third edition of *Motivation and Personality* has been revised to highlight Maslow's creative thinking and emphasize his far-reaching concepts.）」（p.xi.）と，同版を公刊した意義を説明している。

その際，彼らは幾つか手を入れたことを但し書きしている。例えば，「第 13 章はこの本に新しく付け加えられたものである（Chapter 13 is a new addition to this book.）」（p.xi.）とする。ま

6　既述のように 1970 年マズロー著「再版序文」箇所で挙げられていた数多くの参考文献のうち，フレイジャーら第 3 版のマズロー「再版序文」の箇所では幾つも取り除かれ，マズローが何を根拠にそうしたことを述べているのかの裏を取ることが難しくさせられている。具体的なものとしては，次が挙げられる。1970 年マズロー著「再版序文」p.xxii.の上から 7 行目にある参考文献 312 を参照するようにとの文言がフレイジャーら第 3 版の「再版序文」p.xxvii.の下から 14 行目にて除去されていることから，この部分の主張をマズローが何を参考にして書いているのかが不明瞭にされている。同様にマズロー再版 p.xvi.の上から 7 行目にある参考文献が 483 がフレイジャーら第 3 版 p.xxii.の下から 3 行目では除去されている。またマズロー再版 p.xxiii.の下から 13 行目にある参考文献が 69 がフレイジャーら第 3 版 p.xxviii.の下から 6 行目にて除去，マズロー再版 p.xxiv.の下から 18 行目にある参考文献が 85 がフレイジャーら第 3 版 p.xxix.の下から 19 行目にて除去，マズロー再版 p.xxvi.の下から 19 行目にある参考文献 316 がフレイジャーら第 3 版の p.xxxi.の上から 10 行目にて除去，マズロー再版 p.xxvi.の下から 13 行目にある参考文献 301，303，311a，311b，315 がフレイジャーら第 3 版 p.xxxi.の上から 15 行目にて除去されていることを補足しておく。

た，「章目を並び替えた（we have reordered the chapters）」（p.xi.）ことに対する断りや，「私たちは…時間を経た部分を幾つか割愛した（we have … deleted a few sections of dated material.）」（p.xi.）こと等についてもフレイジャーらは述べている。確かに，これまで同著にて載せられていなかったものとして，1958 年にミシガン州立大学で行ったマズローの講義原稿が当該章として新たに盛り込まれている。

しかし彼らの言う「時間を経た部分を幾つか割愛した」という断り 1 つとってみても，小生には気になる点がある。わかりやすい例として，次を挙げたい。マズロー再版 p.93.の下から 18 行目から同頁の下から 11 行目まで（8 行分）が，フレイジャーら第 3 版 p.54.では除去されている。その中では，これまでの臨床的な研究の進展により，「自己実現しつつある人（the self-actualizing man）」には，他でもない基本的欲求の充足によって健康な生活が条件付けられていることが明らかになってきたこと，また，そうした人たちは，自己の有する衝動を受容するなどの特徴があることが明らかになってきたことなどが紹介されている。しかし，フレイジャーら第 3 版の中ではここの箇所の一文も載せられずに除去だけがなされている。

また，マズロー再版の同じく p.93.の下から 10 行目から p.94.の上から 15 行までの 3 段落（25 行分）が，フレイジャーら第 3 版 p.54.でも取り除かれ一文も載せられていない。その中では，「自己実現しつつある人々（self-actualizing people）」（p.94.）には，考えられないほどの「泰然性（detachment）」（p.94.）や「自律性（autonomy）」（p.94.）が見られることから，適応と健全性の概念を分離して考えていく必要があることなどについて詳述されているが，この箇所も第 3 版には一行も載せられていない。しかし，これはフレイジャーらの言う時間を経たという内容に該当する文言と言える箇所なのだろうか。

更にマズロー再版の冒頭箇所である pp.2–5.の 3 頁半分（17 段落分・142 行分），ここは，科学者たちが如何様な動機を抱いて研究を行っていくのが実態であるのか…ということについて論じている部分である。その中では，研究者もまた人間であり，生理，安全，愛や自尊心に関する欲求を欲するものであるが，当然，「自己実現欲求（need for self-actualization）」（p.2.）にも動機づけられており，即ち，明らかに「完成（completion）」（p.2.）や「秩序（order）」（p.2.）を求める衝動があること，「審美的欲求（aesthetic needs）」（p.2.）が存在すること，また，「真理への欲求（need for the truth）」（p.3.）があると詳述されている。しかしこの箇所に相当するフレイジャーら第 3 版の p.182.の箇所では，こうした記述もカットされている。

他にも気になる箇所がある。例えば北方ブラックフット・インディアンについて記述しているマズロー再版の p.124.の上から 17 行目から p.125.の上から 3 行までの 1 段落（22 行分）が，フレイジャーら第 3 版の p.88.では全て消去されている。そこでは，マズロー自身が 1930 年代後葉に社会科学研究評議会からの支援によって調査した同部族での記録が載せられている。これは，彼が自己実現の概念を展開させていく上で大きなヒントを得ることになったフィールドワーク録であり，例えば，同部族の人たちの間では大きないがみ合いなどが殆ど見られず，集団内でみら

れた敵意が非常に低いものであったこと，また友好性が明瞭に見られたことなどが記録されている箇所である。しかもこうしたブラックフット族に関する記述は，彼が死の間際まで日記の中で考究をしていた概念であることはよく知られている。事実，彼の晩年（1970年）の1月17日の日記にも，ブラックフット族の友好性や親切心を「Blackfoot wealth = how much you give away.（ブラックフット族のいう豊かさとは，どれぐらいあなた自身を無償で捧げられるかである）」[7]との記述を見つけることができる。つまり“前書き”の所にある彼らの断りとは異なる，古くなった訳ではないマズローの“自己実現”に関わる文面を作為的にデリートしている箇所をフレイジャーら第3版では数多見られることを指摘しておきたい。同様のフレイジャーらが行った杜撰な編集作業の特徴的なものとしては，脚注を参考されたい[8]。

ところで，こうしたフレイジャーら第3版の難点は，「再版序文」転載箇所や“前書き”箇所だけではなく，“本文中”にも数え切れないほどみられる。以下より，その代表的なものだけを取り上げていくこととしたい。

Ⅳ．フレイジャーら第3版の“本文中”に見られる種々の細工

（a）文章の改竄が無数に見られること

なにより，このフレイジャーら第3版は，学術書にはあってはならない種々の改竄が，9割ちかい頁に見られるという難点を有する著作である点に注意されたい。即ち，マズローが言ってはいない文言をフレイジャーらが意図的に創作していると思われる箇所が無数に見つけられる書物

7　Lowry, R.J., *The Journals of A.H. Maslow, Volume II*, C.A.: Brooks/Cole Publishing Company., 1979., p.1222.（以下，*Volume II* と略記する。）

8　本文中の段落がそのまま抜けている部分は，ゆうに30箇所以上見られる。これに加え段落の半分以上が間引かれている代表的な箇所のみ，ここでは挙げていく。マズロー再版p.77.の下から10–15行目の半段落超（6行分）が，フレイジャーら第3版p.46.では見られない。同様に，マズロー再版p.79.の下から7行目からp.80.の上から13行目までの3段落（20行分）がフレイジャーら第3版p.47.にて消除，マズロー再版p.81.の上から19行目の半段落超（5行分）がフレイジャーら第3版p.48.では消除，マズロー再版p.81.の下から11–12行目の1段落（2行分）がフレイジャーら第3版p.49.では消除，マズロー再版p.84.の上から1行目から23行目までの2段落がフレイジャーら第3版p.50.では消除，マズロー再版p.85.の上から23行目の1段落超（7行超分）がフレイジャーら第3版p.51.では消除，マズロー再版p.86.の下から8行目からp.87.の上から9行目までの3段落（17行分）がフレイジャーら第3版p.52.では消除，マズロー再版p.87.の下から1–10行目までの1段落（10行分）がフレイジャーら第3版p.52.では消除，マズロー再版p.88.の上から6行目から半段落（4行分）がフレイジャーら第3版p.52.では消除，マズロー再版p.91.の上から7行目から18行分がフレイジャーら第3版p.53.では消除，マズロー再版p.91.の下から3行目からp.92.の上から3行目までの半段落超（6行分）がフレイジャーら第3版p.53.では消除，マズロー再版p.208.の下から12行目からp.209.の上から5行までの1段落（11行分）がフレイジャーら第3版p.197.では消除，マズロー再版p.218.の上から10行目から1段落（13行分）がフレイジャーら第3版p.203.では消除，マズロー再版p.246.の上から25行目からの1段落（3行分）がフレイジャーら第3版p.96.では消除，マズロー再版p.246.の下から9–11行目の半段落（3行分）がフレイジャーら第3版p.96.では消除，マズロー再版p.247.の上から16行目からの2段落（11行分）がフレイジャーら第3版p.96.では消除等。

なのである＜小生注；比較を容易にできるよう，相違のある箇所に波線をひいておく＞。

一例として，自己実現しつつある人々に関して説明している箇所において，フレイジャーらに依る改竄を挙げてみたい。マズロー再版 p.165.の下から 7–11 行目では自己実現者について“They have for human beings in general a deep feeling of identification, sympathy, and affection in spite of the occasional anger, impatience, or disgust described below. Because of this they have a genuine desire to help the human race. It is as if they were all members of a single family.（彼らは以下に記述していくように，憤ったり，我慢が難しかったり，イライラしたりすることが時折あるにも拘らず，それでも人類一般に対して，同一視したり，同情や愛情を持っているという深遠な感情を有している。というのも彼らは，人類を助けようという真なる願いを持っているからである。こうしたことは，あたかも彼らが全員，1 つの家族のメンバーであるかのようである）”とマズローは記している。しかしながら，この同じ部分がフレイジャーら第 3 版 p.138.の下から 12–14 行目では，“Self-Actualizing people have a deep feeling of identification, sympathy, and affection for human beings in general. They feel kinship and connection, as if all people were members of a single family.（自己実現しつつある人々は，人類一般に対して同一視，同情，そして愛情という深遠な感情を有している。彼らは，あたかもすべての人々が 1 つの家族のメンバーであるかのように血縁関係，親類関係のもとにあるように感じている）”となっており，違目が見られる。ところが後者と同じ文言は，これのオリジナル論文である 1950 年の Self-Actualizing People の p.24.にも，それが再掲載された 1954 年初版の p.217.にも見られない。また，同論文が再掲載された 1956 年の著作 *The Self* の p.179.にも，また，1963 年に再掲載された *The World of Psychology II* の p.541.にも載せられていない[9]。

酷いものでは，下のようなものもある。人の認知の在り様について説明している箇所において，次のような径庭が見られる。マズロー再版 p.224.の下から 8–17 行目では，“It is by now generally accepted that theory building customarily implies selection and rejection, which in turn means that a theory must be expected to make some aspects of the world *more* clear and other aspects *less* clear. One characteristic of the most nonholistic theories is that they are sets of rubrics or classes. But no one has ever devised a set of rubrics into which *all* phenomena fit easily ; there are always some left out, some that fall in between the rubrics, and some that seem to belong simultaneously in various rubrics. Furthermore, this kind of theory is almost abstractive, that is to say, it emphasizes certain qualities of phenomena …（慣習によって生み出された理論は，選択と拒絶をあらわす，ようは，ある理論は世界の幾つかの面を「一層」明確にし，他の面を「更に」不明瞭にしがちであるというのと同じような意味でこれまで一般的に受け入れられてき

9　ただし，この 1950 年論文は 1964 年著作 *Perspectives on the Group Process* にも再掲載されているが，そこでは Interpersonal Relationship SA から Creativeness の箇所のみが載せられている。つまり当該箇所は載せられていないことを補足しておく。

ているのである。多くの非全体論的理論の特徴の1つには，それらが型と分類の組み合わせであるという点がある。しかし「全て」の現象に容易に適合するような一連の型なるものを作り上げた人間は，これまで誰もいない。如何なる時でもいずれにも当てはまらないものがあったり，2つの型の中間に位置するものがあったり，様々な型の中に同時に当てはまるものもあったりするのである。更に，この種の理論はほぼ抽象的なものであって，即ち，それは…現象の確固たる質を強調するものなのである）”とマズローによって記述されている。他方で，フレイジャーら第3版のp.209.の上から19–20行目では，“Theories built upon categories are almost always abstractive, that is to say, they emphasize certain qualities of phenomena …（種々の理論が分類によって作り上げられているということは，ほぼいつでも抽象的なものであって，即ち，そうしたものは…現象の確固たる質を強調するものなのである）”と文章内容が編集者たちの手によって変えられている。

別の目に余る例として，あえてマズローがアリストテレス学派と比較すべき研究者たちの名を挙げて，彼らの概念や主張との対比を見るよう促しているにも拘らず，それらを安易に「新しい概念」と粗略して，読み手にとっては甚だ不親切なものとなっていると言わざるをえない改竄箇所もある。マズロー再版のp.271.の上から3–6行目では，“if I had to put into a single phrase, the contrast between the Aristotelian theory and the modern conceptions of Goldstein, Fromm, Horney, Rogers, Bühler, May, Grof, Dabrowski, Murray, Sutich, Bugental, Allport, Frankl, Murphy, Rorschach, and many, many others, …（もし私が，アリストテレスの理論と，ゴールドシュタイン，フロム，ホーナイ，ロジャーズ，ビューラー，メイ，グロフ，ダブロフスキー，マレー，スティッチ，ブーゲンタール，オルポート，フランクル，マーフィー，ロールシャッハなどの現代的な概念との間における比較を一言で述べなければならないとしたら…）”とあるが，フレイジャーら第3版のp.115.の下から20–21行目では“if I had to put into a single phrase the contrast between traditional concepts of normality and the new concept that is emerging,…（もし私が，正常性に関する伝統的な種々の概念と生まれつつある新しい概念との間における比較を一言で述べなければならないとしたら…）”との不備が見られる。最早誰と誰の主張・理論を比較すべきかもわからない状態とされてしまっている。

フレイジャーらによる本文中の改竄箇所としては他にも次がある。マズロー再版のp.1.の下から1–3行目では，“In this chapter, I wish first to spell out some of the more important truisms on which this thesis is based. Some implications and consequences of the thesis will then be presented.（この章において私＜小生注；マズロー＞は，議論の基となっている幾つかの大変重要で，かつ，わかりきった事柄について論じてみることから始めたく思う。そうして，このテーマに関する幾つかの示唆と結論について論じてみたく思う）”としているが，フレイジャーら第3版のp.182.の下から6–8行目では“In this chapter, I wish to spell out some of the more important implications and consequences of the recognition that science is first of all a human creation

that must be examined psychologically.（この章において私は，まず，科学が心理学的に検証したに違いないとする人類全体が生み出してきたものについて確認することで，幾つかの大変重要となる示唆と結論について論じてみたく思う”と出自不明の文章が入れ込まれている（改竄されている）。こうなると，この文章でいう「私」とは，フレイジャーら編集者のことを指すのか，それともマズローのことを指すのかも不明瞭なものとなる。同様のフレイジャーらが改竄を行った数々としては，脚注を参考のこと[10]。

（b）マズローが用いていた用語の挿げ替え

加えて，再版でマズローが使っていた単語を，フレイジャーらがあえて使わずに，恣意的に別の用語に曲筆している箇所が幾つも見つかることも指摘しておきたい。例えばマズローの自己実現論を考える際，「兄弟愛（brotherhood）」[11] の概念は重要である。というのも，マズローは死の直前まで，この brotherhood の行き渡った社会に関して，様々なメモを日記の中で残しているからである（1969 年 11 月 28 日を参照のこと）[12]。この語はマズロー再版 p.71.に挙げられている。しかしながら，それに該当するフレイジャーら第 3 版 p.39.では「コミュニティ感覚（community feeling）」なる別の用語に置き換えられていることに気づく[13]。

同様の操作は，他でも見られる。マズロー再版 p.166.にて，「自己実現」者に見られる特徴と

10　マズロー再版 p.23.の下から 4–5 行目では，“If we say that a person feels rejected, what do we mean?（もし我々が，ある人が拒絶されていると感じていると言うのであれば，それは我々にとって何を意味しているのだろうか？）”とあるが，フレイジャーら第 3 版 p.7.の上から 5–6 行目では“Consider, for instance, what we mean when we say that a person feels rejected.（例えば，ある人が拒絶されていると感じていると我々が言う時，それは我々にとって何を意味しているのかということを考えてみてほしい）”と若干とはいえ改竄されている。しかしこうした恣意的な手入れは，マズローが展開していく理論の誤解，誤謬の端緒となりかねないものであることは誰の目から見ても明らかであろう。それにも拘らず，なぜ，フレイジャーらがこうした細工を重ねるのか，小生には理解に苦しむ。

　マズロー再版 p.210.の下から 2–5 行目では，“One who has already been put into a rubric tends very strongly to be kept there, because any behavior that contradicts the stereotype of the rubric can be regarded simply as an exception that need not be taken seriously.（既に概略化されたその人は，まさにそこに留め置かれるような傾向が強く見られる。何故なら，概略化されたステレオタイプなものとは相反する如何なる行為も，真剣に取り扱う必要のない，単なる例外的なものとしてみなされるからである）”とあるが，フレイジャーら第 3 版 p.199.の上から 10–13 行目では“A thing or person that has been placed in a category tends to be kept there, because any behavior that contradicts the stereotype can be regarded simply as an exception that need not be taken seriously.（あるカテゴリーの中に位置づけられた事象ないし人間は，そこに留め置かれる傾向がみられる。何故なら，ステレオタイプなものとは相反する如何なる行為も，真剣に取り扱う必要のない，単なる例外的なものとしてみなされるからである）”と改竄されている。こうした本文中の細工は，無数にあることを指摘しておきたい。

11　*Volume II*., p.1211.

12　これについては，拙稿「今日の所謂「自己実現」社会に関する一考察―マズロー「自己実現」社会概念との比較において―」，『商経論叢』，神奈川大学経済学会，第 51 巻第 4 号，2016 年，71–83 頁を参照のこと。

して「共同社会感情（*Gemeinschaftsgefühl*）」なるキーワードを挙げている。*Gemeinschaft* とは，簡潔に言えば，地縁や精神的な連帯などによって自然発生的に形成した社会的な連携のことを意味する用語であり，マズロー初版や再版のみならず，この論文の基となった1950年論文“Self-Actualizing People：A Study of Psychological Health”のp.25.でも，更にはこの論文が再掲載された1963年著作 *The World of Psychology II*., p.543.や，同じく1964年著作 *Perspectives on the Group Process*., p.290., また1956年著作 *The Self*., p.181.においてもマズロー自身によって好んで用いられている語句である。しかしフレイジャーら第3版p.140.では，当該用語が単に「人間味（human warmth）」となる用語に置き換えられている。また，他の箇所で挙げられていた *Gemeinschaftsgefül* の用語は，そもそもそこから取り除かれており，それに該当する用語すらも見られなくなっている箇所がある（例えばマズロー再版p.287.とフレイジャーら第3版p.176.を比較のこと）。こうした用語の付け替えは，編集者がよく述べがちな“紙面上の関係で…”という事由に該当するものですらない。

（c）参考文献に関する指摘

第3版の参考文献一覧には，恣意的かつ大幅な割愛も見られる。マズロー再版の参考文献欄には，500冊程度の著作名が挙げられている（pp.329–353.）。しかしフレイジャーら第3版では，そのうちの，ゆうに300以上が取り除かれている（上記2冊の参考文献頁一覧を比較されたい）。これでは第3版の読者は，その「再版序文」転記箇所同様，マズローが何を基にそうした主張をしたのかの裏が取りにくくなってしまう。

例を挙げていきたい。マズロー自身が「自己実現」者に関する研究の大きなきっかけの1つとなったとも明記している欧州からの亡命者「M.ヴェルトハイマー（Wertheimer, M.）」について考えたい。マズローはヴェルトハイマーを師と仰ぎ，1930年代後葉以降，種々の指導を彼から直接受けている。そのヴェルトハイマーが著したのが，1961年の論文“Some Problems in the Theory of Ethics”であり，マズロー再版p.237.の上から4行目において参考文献467としてそれを参照するよう勧められている。しかしフレイジャーらが編集した第3版p.72.の上から11行目ではそれが消去されており，また，参考文献が載せられている箇所（pp.239–243.とpp.266–271.）にも同論文が見あたらない。

13　ところで，このようなマズローがわざわざ意味を付していた用語をすり替えている点について言えば，他にも次のような悪例がある。1965年にマズローは，*Eupsychian Management* なる著作を公刊した。この著作も彼の死後（1998年），D. C.ステファンズ氏らが編者者となり，彼の知人たちのコメントも挟んで，*Maslow on Management* と書名を変えて公刊された。しかし同著も，マズローがあえて特別な意味を付したEupsychianの用語を作為的に変えてEnligtenedなる語に置き換えている。しかしながら，*Eupsychian Management* の訳本が抄訳本であり，*Maslow on Management* の和訳本はほぼ全訳版であることもあってか，用語の改竄が見られる後者（の訳本）を好んで用いる研究者たちが多い。マズロー自身による原著が存在するにも拘らず，である。

上記ヴェルトハイマーを含む，ゲシュタルト心理学者たちから大きな影響を受けたことも何度となくマズローは残している。そうしたゲシュタルト心理学の一泰斗として，「W.ケーラー（Köhler, W.）」の名は広く知られている。事実，マズロー再版 p.62.の下から 7 行目において，参考文献 238 のケーラーの 1938 年著作 *The Place of Values in a World of Facts* を参照するよう勧められているものの，そこに該当するフレイジャーら第 3 版 p.35.の上から 2 行目では同著が消されており，また，参考文献該当頁にも取り上げられていない。これらのことから，フレイジャーらは，マズローの真意を測ろうとはしない字面だけを追っている編集者ではないのかとの疑念が生じてくる。

加えて，文化人類学に関する考え方を理解する上でマズローが参考したとするミード女史（Mead, M.）らによる 1942 年著作 *Balinese Character : A Photo-graphic Analysis* や 1935 年著作 *Sex and Temperament in Three Primitive Societies* をはじめ，同じくマズロー自身が大きな学問上の影響を受けたとするフロム（Fromm, E.）の種々の著作（例えば，1950 年著作 *Psychoanalysis and Religion* や 1955 年著作 *The Sane Society*，1957 年著作 *The Forgotten Language*，1964 年著作 *The Heart of Man* 等）も，更には，マズローが自己実現者に見られるとした種々の特徴についての示唆を与えたソローキンら（Sorokin, P.）による 1950 年著作 *Explorations in Altruistic Love and Behavior* も不思議なことにフレイジャーら第 3 版の参考文献からは除却されている。マズローが誰から大きな影響を受けたのかを知らない素人だからこそできる暴挙ではないか…と推察せざるを得なくなってくる。これら以外の再版で挙げられていた参考文献が第 3 版にて不明瞭にされている代表的なものとしては，脚注を参照のこと[14]。

（d）脚注に関する留意点等

生前，マズローが読者が裏をとれるようにとしてわざわざ付しておいた脚注をフレイジャーらが勝手に省略したりする操作は，何も「再版序文」箇所だけではなく，本文中でも幾つも見つけることができる。こうした本文中にある脚注の恣意的な除去も，マズローが往時，何を言わんとしていたかを不明瞭なものとさせてしまいかねない事象である。例えば，自己実現者が日々の生

14　参考文献が取り除かれている代表的なものとしては，次が挙げられよう。マズロー再版 p.219.の下から 1 行目にて，Einstellung に関する参考文献 279（Luchins, A.の 1942 年論文 Mechanization in problem solving : the effect of Einstellung.）を参照するよう勧めているものの，フレイジャーら第 3 版 p.204.では同論文が省略されており，また，参考文献該当頁にも取り上げられていない。マズロー再版 p.263.の下から 3 行目において，参考文献 63 の Braden, W.の 1967 年著作 *The Private Sea*，参考文献 189 の Heard, G.の 1959 年著作 *Training for a Life of Growth*，参考文献 365 の Otto, H.が編集した 1966 年著作 *Exploration in Human Potentialities*，参考文献 366 の Otto, H. and Mann, J.が編集した 1968 年著作 *Ways of Growth*，参考文献 368 の Owens, C. M.の 1963 年著作 *Discovery of the Self*，参考文献 415 の Schutz, Z.の 1968 年著作 *Joy*，そして参考文献 446 の Tart, C.が編集した 1969 年著作 *Altered States of Consciousness* を参照するよう勧めているものの，フレイジャーら第 3 版 p.103.ではこれらが省略されており，また，参考文献該当頁にも取り上げられていない。

活の中で体現しているという重要な「B愛情（B-love）」の概念がマズロー再版p.183.の脚注1にて説明されているものの，不思議なことにフレイジャーら第3版p.150.では全て取り除かれている。しかし，これはフレイジャーらの言う時間を経た箇所として該当する部分なのか，小生は甚だ疑問を感じる。更には，欲求について考察する際，低次，即ち物質的欲求のみを念頭にモノを考えがちであるという傾向に注意を促したマズロー再版pp.230–231.脚注2（28行分）があるが，フレイジャーら第3版p.63.では全て削除されている（これら以外の脚注省略の代表箇所としては，脚注を参照のこと[15]）。

しかしながら，これらよりもとりわけ明示しておきたい脚注についての看過できない点がある。第3版編集者であるフレイジャーらが手を加えているために「編集者注（Editor's note）」と“明記している箇所”と，そうであるにも拘わらず編集者注と“明記していない箇所”が第3版では混在しているという点である。

例えば，マズロー再版p.149.の上から16行目に該当する箇所であるフレイジャーら第3版のp.125.の下から15–17行目に「編集者注」と確かに記された上で，フレイジャーらのコメントが3行分加えられている。また，他にもマズロー再版p.281.の下から1行目に当たるフレイジャーら第3版p.171.の下から1–3行目箇所にも，「編集者注（Editor's note）」と明確に示された上で，フレイジャーらのコメントが載せられている。しかし，編集者たちが勝手に手を入れた“その殆どの箇所では注記がなされていない”。換言すれば，ある箇所では編集者注としての注記を行っているにも拘らず，他の箇所では，そうした注記をフレイジャーらは一切していないのである。読者からして，それがわかる何らかの目印がつけられている訳でもない。

こうした改竄のわかりやすい例を挙げたい。マズロー再版のp.8.下から8–9行目の脚注箇所では，“These last functions are ordinarily the exclusive responsibility of the scientist.（こうして挙げられた最後の機能は通常，科学者に特有の責務である）”という一文があるが，フレイジャーら第3版p.185.の下から2–3行目では“These last functions deal with what is verifiable and testable, and are ordinarily the exclusive responsibility of the scientist.（こうして挙げられる最後の機能は，如何様に証明し検証しうるのかということを取り扱うものであって，通常，科学者に特

15　脚注において大幅な割愛がなされている他の箇所としては，次のものが挙げられよう。マズロー再版p.110.の脚注2（3行分）がフレイジャーら第3版p.78.では消除。同様に，マズロー再版p.209.の脚注7（8行分）がフレイジャーら第3版のp.198.では消除，マズロー再版p.212.の脚注8（15行分）がフレイジャーら第3版のp.200.では消除，マズロー再版p.215.の脚注12と13（12行分）がフレイジャーら第3版p.202.では消除，マズロー再版p.216.の脚注14の半段落（8行分）がフレイジャーら第3版p.203.では消除，マズロー再版p.217.の脚注15（9行分）がフレイジャーら第3版p.203.では消除，マズロー再版p.221.の脚注17（6行分）がフレイジャーら第3版p.205.では消除，マズロー再版p.226.の脚注22の半段落超（20行分）がフレイジャーら第3版p.208.では消除，マズロー再版p.227.の脚注23（11行分）がフレイジャーら第3版p.208.では消除，マズロー再版p.245.の脚注1（23行分）がフレイジャーら第3版p.95.では消除，マズロー再版pp.254–255.の脚注5（7行分）がフレイジャーら第3版p.103.では消除，マズロー再版p.259.の脚注7（5行分）がフレイジャーら第3版p.108.では消除されている。

有の責務である)”と作文されている。確かに，こうしたことと近似した文言は再版の後ろの方で記載されてはいる。しかしながら，こうした注を載せない細工，この書き方では，第 3 版の読者らは，編集者注と印づけされている箇所が幾つもあることから，それがなされていない上のような改竄箇所を，マズローが書いたものとして必ずや誤解して読むだろう。

つまり小生が懸念している点として，こうした読者の誤解は他の書き物への転記が行われる際，そのままマズローの言葉として引用文とされていくことは火を見るよりも明らかであろう。もって，こうしたマズローの言葉を忠実に伝えるという責任を編集者らは軽視しているように小生には思えてならない。換言すれば，編集者であるフレイジャーらが手を加えているために“編集者注と明記している箇所”と，そうであるにも拘らず“編集者注と明記していない箇所”が第 3 版では混在していることから，必ずや，これは読者にとって大きな誤解を生む序開となる（こうした編集者注がなされずに，フレイジャーらが脚注を触っている箇所はゆうに 50 以上を数えることも付記しておく)。

補遺として，他にもフレイジャーら第 3 版には更なる幾つもの問題点が見られる。具体的に挙げるなら，再版においてマズローが脚注としていた文言がフレイジャーら第 3 版では本文中に移し入れられている箇所が無数にあること[16]，それとは逆に，マズロー再版では本文中に入れられていた文言がフレイジャーら第 3 版では脚注に移し替えられている箇所が数多見られること[17]，更には上述したように，マズロー再版の本文中の文章の順番をフレイジャーらは入れ替えてしまっているため，該当する一文が何処にいってしまったかわからなくなってしまった箇所も多数見られることも付言しておく[18]。

16　マズロー再版においてマズローが脚注としていた文言がフレイジャーら第 3 版では本文中に入れ込まれている箇所として，例として次がある。マズロー再版 p.203.の脚注 1 の前半部分が，フレイジャーら第 3 版では p.194.本文冒頭へと移し替えられている。マズロー再版 p.208.の脚注 6 が，フレイジャーら第 3 版では pp.197–198.本文中に移し替えられている。マズロー再版 p.221.の脚注 18 の前半部分が，フレイジャーら第 3 版では p.206.本文冒頭へと移し替えられている。マズロー再版 p.227.の脚注 24 が，フレイジャーら第 3 版では pp.208–209.本文中に移し替えられている。マズロー再版 p.249.の脚注 2 が，フレイジャーら第 3 版では p.98.本文中に移し替えられている等。

17　マズロー再版では本文中に入れられていた文言がフレイジャーら第 3 版では脚注に移されている箇所として，例えば次がある。フレイジャーら第 3 版の p.203.の脚注 8 は，マズロー再版では p.217.の本文中の文言である。

18　マズロー再版の本文中の文章の順番をフレイジャーら第 3 版では入れ替えてしまっているため，該当する一文が何処にいってしまったかが不明瞭にされている箇所もある。例えば，マズロー再版 p.277.の 2 段落目冒頭の It has been my pleasure の文に始まり p.278.の上から 17 行目までの文章と，同じく p.278.の 2 段目冒頭の There is another important problem の文に始まり p.279.の 9 行目までの文とが，フレイジャーら第 3 版 p.120.の下から 2 行目から p.122.の上から 11 行目までとにかけて逆の順番となって載せられている。また，別の例として，マズロー再版 p.165.の 3 段落目の中頃にある Because of this から始まる文が，フレイジャーら第 3 版 p.138.では 4 段落目末尾の一文となっており，即ち，配置場所が変わって載せられている。

V．むすびにかえて

フレイジャーらは第3版の序文箇所にて，確かに章目を並び替えたり，（第13章として）新しい原稿を入れた等の断りを入れていた。しかし本稿で見てきたように，フレイジャーらが断りを入れていない，少なくとも次のような問題点があることを確認してきた。

少々冗長なものとはなるが代表的なものだけを再確認のために挙げていくと，脚注が勝手に抜かれているためにマズローが如何様な根拠に基づいてそう主張しているのかの裏が非常に取りづらくなったこと，注記についていえば，編集者注をつけて手を入れている箇所とそうではない箇所が混在していること，もって読者からすると，その脚注を誰が書いた注記なのかについての誤解が生じうること，マズローによって参考文献一覧に挙げられていた書物の半分以上が消し去されていること，なかでもマズローが非常に大きな影響を受けたとする文献までも取り除かれてしまっていること，マズローがあえて用いていた用語を意図的に，何らかの注釈を沿えることもなく置き換えてしまっていること，本文中の文言を勝手に脚注に移し替えていること（その逆もみられること），マズローの本文の順番をあちこちで弄しているためマズローがそうした順序配置をしているかのように誤解を与えかねないこと，なにより，ほぼ全頁にわたってフレイジャーらによる細かな改竄が無数に見られること等が挙げられよう[19]。つまり，この本は，ダイジェスト版とも，圧縮版とも言えないシロモノなのである。

ようは，フレイジャーら第3版に見られる文章は，マズローが書いたのかそうではないのか，この順序はフレイジャーによる配置なのかそうではないのか等が全くもって不明瞭なものとされてしまっているのである。つまり，この第3版に書いてある文面はマズローが本当に言ったのかさえもわからない出自不明の文章が無数に見られるのである。もって，こうしたフレイジャーら第3版の実態を知らないならば，これはマズローが述べた言葉だ…として，マズローが言っていない言葉も，他の著作や論文等に転記されていくことになろう。

ましてや，マズローが言ったわけではない言葉が列挙されたこの著作を学術書として用いることなどできやしない。というのもフレイジャーら第3版の読み手たちは，その文言がフレイジャーらに依るものであるにも拘らず，それをマズローの言葉と当然誤解し，また，引用したりするだろうからである。そうしたことの結果として，マズローが伝えたかった真意と，社会における彼の概念の咀嚼・理解との間に，齟齬が生じかねないのである。こうしたことから第3版は，少なくとも，小生からして学術書として使うべきではないものと言明ざるを得ない。そもそも，マズロー自身が著した再版も初版もあるのだから。

19　マズロー理論を20年以上に渡って解説してきた論者の1人として，渡辺聰子氏（現・中央大学教授，上智大学名誉教授）が挙げられよう。女史が，マズロー欲求階層説や「自己実現」概念の解説者として広く知られるようになった一つのきっかけとして，1995年3月に日本経済新聞によって組まれた連載「生きがい・自己実現と組織」がある。しかし女史のマズロー理論に関する説明は，次の点において重大な瑕疵が

見られると言わねばならない。

問題点 1～マズローの文言が改竄されているフレイジャーら第 3 版を渡辺氏が好んで用いていること。

→女史が参考文献として頻繁に挙げている著作は，本稿にて問題視してきたフレイジャーらによる第 3 版である。しかし記述してきたように，種々の問題点を目にする度，長年に渡ってこれまでマズロー理論について解説してきた渡辺氏が，何故，こうした難点だらけの第 3 版を好んで用いるのかが小生には理解しがたい（女史の著作『生きがい創造への組織変革；自己実現至上主義と企業経営』（1994 年）に加え，『グローバル時代の人的資源論；モティベーション・エンパワーメント・仕事の未来』（2008 年），また『グローバル化の中の日本型経営；ポスト市場主義の挑戦』（2015 年）にて，これらフレイジャーら第 3 版が参考文献として挙がっている。しかしながら渡辺氏は，これらの何れかにおいても問題の多い第 3 版をあえて用いている理由を説明してはいない）。

問題点 2～渡辺氏はマズロー欲求階層説に関する基礎的な知識すら欠落していること。

女史は，マズロー当該理論に関して次のように書いている。「自己実現の概念をこうした実際的な経営上の問題へ適用するための基礎を提供したのが，1950 年代に米国の心理学者マズロウによって提示された「欲求（ニーズ）の 5 段階論」である」，と（「勤労者の生きがいと自己実現―変容する価値観と仕事意識―」『経済と労働』（1995 年）4 頁）。

→他方で，マズローの欲求階層説が既に 1943 年時点で明示されていたことは，研究者たちの間でとりわけよく知られた初歩的な事実である。また 1948 年論文にも，このことについては明示されている。例えば，次のマズローの論文を参照のこと（“A Preface to Motivation Theory”., *Psychosomatic Medicine*., 5., 1943., pp.91-92.の脚注 12，“A Theory of Human Motivation”., *Psychological Review*., 50., 1943., pp.370-396., “"Higher" and "Lower" Needs”., *Journal of Psychology*., 25., 1948., pp.433-436.）。

問題点 3～渡辺氏は充てるべき訳本すらも取り違えていること。

女史が参考文献として挙げているマズロー 1954 年初版についても，誤記は見られる。一例として女史は，『ポスト日本型経営；グローバル人材戦略とリーダーシップ』243 頁にて，「Maslow, Abraham H., *Motivation and Personality*. New York：Harper Brothers, 1954.」を参照したとし，その訳本として「小口忠彦訳『人間性の心理学―モチベーションとパーソナリティ』改訂新版　産業能率大学出版部，一九八七年」を充てている（下線は小生による）。

→この渡辺氏の記述は，学術論文上致命的なミスである。というのも 1954 初版の邦訳書は，小口忠彦監訳『人間性の心理学』（産業能率短期大学出版部，1971 年）であり，マズロー再版の邦訳書は，小口忠彦訳『［改訂新版］人間性の心理学』（産能大学出版部，1987 年）だからである。マズローを幾らかでもかじった研究者であれば，書名が同じ *Motivation and Personality* であっても，1954 年初版と 1970 年再版とでは，その様相はかなり異なることを承知していなくてはならない（というのも 1970 年再版では，ゆうに 500 箇所以上に及ぶ加除修正等が施されており，一読さえすれば，すぐに文章の違いに気づくはずだからである）。具体的には，本稿の冒頭で述べたように Being-values, metaneeds, metamotivation, peak experiences, B-love, そして 2 種類の自己実現に関する概念等についての記述の有無の違いである。こうした事実から，1954 年初版の訳本として，1970 年再版の邦訳書を充当し，かつ，そのことの注記を何ら付さずに平然と利用することは，学術研究論文としては許されない行為である。このような訳本の取り違えは，真摯な態度で Maslow 研究が行われていないことの証左に他ならない（三島斉紀，「A. H.マズローの *Motivation and Personality* に関する一考察」『商経論叢』，神奈川大学経済学会，第 50 巻第 1 号，2014 を参照のこと）。

問題点 4～渡辺氏のマズロー「自己実現」概念に関する誤想について。

なかでも，渡辺氏の最大の問題点は次である。大凡，マズロー独自の「自己実現」概念は，真・善・美等から成る存在価値（Being-values）を至高経験（peak experiences）時に認識し，それに動機づけられて（metaneeds, metamotivation），そうしたことを体現して日々生きていくこと（B-love 等）を指している。もって同概念は，非自己中心的な概念であることは明白である（本稿で取り上げてきたマズロー日記（*Volume II*）の中で，彼自身が自己実現が自己中心的なものではないと示唆していたことは確認してきた

通りである。また，これと同様の記述は，マズローの後年の著作において一貫して見られる）。しかし女史は，マズロー「自己実現」概念を次のように解説している。20年以上前のものから，ごく最近のものまで，10程度の女史のこれに関連する引用を挙げておく（下線は小生による）。

・マズローの言う自己実現の欲求とは，「自分の可能性を実現し，自己発展を継続し，広い意味で創造的であること」（『グローバル化の中の日本型経営；ポスト市場主義の挑戦』14頁。（これと一言一句全く同じ文言が同著196頁だけでなく，渡辺氏の記した『グローバル時代の人的資源論；モティベーション・エンパワーメント・仕事の未来』74頁，『ポスト日本型経営；グローバル人材戦略とリーダーシップ』2頁，『生きがい創造への組織変革；自己実現至上主義と企業経営』21頁，「勤労者の生きがいと自己実現―変容する価値観と仕事意識―」『経済と労働』4頁（1995年），および「モティベーション研究とその経営現場への応用：経営学の視点から」『産業心理学研究』第28号第2号の79頁（2015年）にも見られる。

・「自己実現至上主義（仕事は何よりもまず生きがいを与え，自己発展のプロセスとなるものでなければならない）」。『生きがい創造への組織変革；自己実現至上主義と企業経営』，2頁）。

・「管理職の多くは，働く主要な目的は仕事そのものに関わる達成感，チャレンジ，自己実現であると考えている。彼らを動機付けているのは昇進を伴うグローバルなレベルでの移動である」（「組織における「分配の公正」と「自己実現」―仕事意識の日英比較研究」『2004年度科研費研究実績報告書』）

・「物質的生活水準の向上は，人々の仕事や組織に対する考え方に大きな変化をもたらしている。一つの大きな変化は，仕事における自己実現の欲求の拡大である。すなわち仕事を通じて自分能力を発揮し，自らを発展させたい，自己を表現したい，そして仕事を意義あるものにしたいという欲求が，経済的報酬をできるだけ多くしたいという欲求を凌駕するようになったのである[(1)]。」（『グローバル時代の人的資源論；モティベーション・エンパワーメント・仕事の未来』65-66頁）。

・「自己実現至上主義とは，仕事の第一義的意味は自己実現であるとする仕事観であり，仕事は何よりもまず生きがいを与え，自己発展のプロセスとなるものでなければならないという考え方である。」『生きがい創造への組織変革；自己実現至上主義と企業経営』21頁）。

・別の箇所で渡辺女史は，日本人勤労者全般について，ブルーカラー型，伝統的日本型，新人類型，ゴールドカラー型とに4分類し，このゴールドカラー型従業員について次のような主張をしている。「仕事によって技術や知識を身につけて自己の能力を伸ばすことを期待し，可能性を最大限に追求する。[(21)]仕事の内容そのものに意義を見出し，精神的充足を求める。達成した成果に対して正答な評価を受けることに意義を感じる。彼らにとって伝統的な意味での成功や出世は余り重要でない。自己実現至上主義，権利主張主義，脱物質主義などのポストモダン的価値観の影響を最も強く受けているグループである。生活全般にわたって意欲的で私生活においてもリベラルな態度を持ち，妻にも職を持ち，仕事を通じて自己実現を追求して欲しいと考える。」（『生きがい創造への組織変革；自己実現至上主義と企業経営』113頁）。

・「ゴールドカラー（管理職・専門職，起業家，コンサルタントなど）」は，「「自己実現至上主義者」であり（中略），戦略的プロセスに参加させ，企画を実現する機会を与え，成果に見合った報酬を与えることによって創造的能力を発揮させ，組織の活性化を図ることができる。」（「組織における「分配の公正」と「自己実現」―仕事意識の日英比較研究」『2006年度科研費研究成果報告書概要』）

・「幹部経営者の仕事は，より大きな責任を引き受けたい，仕事を成功させたいという達成意欲を満足するものである。また不確実な状況の中でリスクを負いながら計画を遂行していくというチャレンジに満ちた仕事である。成功すれば得るものは大きいけれども，失敗すれば失うものも大きいという，いわば「賭け」（つまりギャンブル）の要因を含んでいる。このチャレンジの過程におけるエキサイトメントと成功したときの達成感は「自己実現の欲求」を大いに満足するものであり，大きなインセンティブになる」（『グローバル化の中の日本型経営；ポスト市場主義の挑戦』186-187頁）。

・「高学歴グループ（修士・博士課程卒業およびそれ以上）においては，給料や昇進よりもチャレンジ・達成感が重要であり，自己実現至上主義の傾向が見られる。」『生きがい創造への組織変革；自己実現至上主義と企業経営』109頁）。

・「＜仕事が面白い＞＜仕事が楽しくてしようがない＞という人を，筆者は「自己実現至上主義者」と呼

び，拙著『生きがい創造への組織変革』（東洋経済新報社）の中で，こうした人が近年，特に若年層，管理職，専門職の間で増えていることを指摘した」。（「企業トップに聞く 21 世紀型日本の人材」『SHOKUN !』，2000 年 12 月号，148 頁。」

→上記から女史がマズロー「自己実現」を説明する際のキーワードとして「成功すれば得るものは大きいけれども，失敗すれば失うものも大きいという，いわば「賭け」（つまりギャンブル）の要因を含んで」おり，「このチャレンジの過程におけるエキサイトメントと成功したときの達成感は「自己実現の欲求」を大いに満足」させるもので，それには「昇進を伴うグローバルなレベルでの移動」が伴うと尚良く，「戦略的プロセスに参加させ，企画を実現する機会を与え，成果に見合った報酬を与え」，とりわけ，「ゴールドカラー（管理職・専門職，起業家，コンサルタントなど）」や「高学歴グループ（修士・博士課程卒業およびそれ以上）においては，給料や昇進よりもチャレンジ，達成感が重要」…と考えていることがわかる。これらの解説から明らかなように，渡辺女史はマズローの言う Being-values，B-love 等について何一つ説明をしておらず，それどころか一貫して，マズロー「自己実現」概念を非自己中心的な概念として扱っていないことが伺える。すなわち女史は，マズロー「自己実現」理論について何も精査していないことが一目瞭然である。

最後に，渡辺女史は財界との繋がりが深く，そうした経営者たちの集まる場でもこうしたマズロー「自己実現」についての妄言を続けている。一例として「企業トップに聞く 21 世紀型日本の人材」『SHOKUN !』，2000 年 12 月号の 138-155 頁では，日本を代表する財界人であるオリックス会長，ユニ・チャーム社長，伊藤忠商事社長，ソニー生命保険社長，富士ゼロックス会長，NEC 社長，資生堂会長らと対談しているが，女史の紹介するマズロー「自己実現」の説明箇所には，やはり Being-values，B-love，metaneeds 等の概念が何も触れられていない，虚偽を巻き散らかしている。

以上のように，渡辺氏の論述は，学術論文として基本的なルールの喪失が見出される。原著を熟読せず，邦訳書すらも取り違えながら咀嚼不十分な妄想を財界，また，多額の科研費を使って学術の場でどれだけ披瀝しようとも，企業経営の発展に何も寄与しないばかりか，その造言はかえって発展の阻害とさえなる。